

水野庄吾

京都大学大学院博士課程

efforts.0213@gmail.com

要旨

本発表の目的は、ロシア語形容詞の短語尾形の振る舞いに着目し、その性質を再検討することである。現代ロシア語の多くの形容詞には、長語尾形 (LF) と短語尾形 (SF) の2種類があり、主に言語類型論の文脈において、長語尾形は名詞型 (noun-like)、短語尾形は動詞型 (verb-like) 形容詞として分析されてきた (Corbett 2004; Geist 2010; Plungian 2011)。これは長語尾形が名詞と同じ文法範疇を有し、述語と名詞修飾等の用法を持つのに対し、短語尾形は格変化を持たず、述語用法のみを有するなどの動詞的特徴に起因する。しかしながら、短語尾形に関するこのような定説は、現代ロシア語での振る舞いのみにしか目を向けておらず、ロシア語の形容詞の歴史的な変容という通時的な側面や他の品詞との関連といった共時的な側面が考慮されているとは言い難い。そこで本発表では、Shibatani (2019) などで提唱されている体言化理論の観点から短語尾形を再検討し、これは述語機能に特化した準体言であることを主張する。

1 はじめに

本発表の目的は、ロシア語形容詞の短語尾形の振る舞いに着目し、その性質を再検討することである。ロシア語の多くの形容詞は、長語尾形と短語尾形の2種類の語尾を持つ (短語尾形の有無については3節で詳述する)。長語尾形は述語用法、(名詞) 修飾用法、名詞句用法¹を持つのに対して、短語尾形は述語用法しか持たない。以下の (1) を参照されたい。

(1) 長語尾形

述語用法 :	On	dobr-yj
	he	kind-M.SG.NOM
	'He is kind.'	
修飾用法 :	dobr-yj	mal'čik
	kind-M.SG.NOM	boy.M
	'a kind boy'	

¹ 本発表では、名詞句内の主名詞として機能するものを名詞句用法と呼ぶ。

名詞句用法： Vs-ego **dobr-ogo!**
 all-M.SG.GEN kind-M.SG.GEN
 ‘All the best!’

短語尾形

述語用法： On byl **dobr-Ø**
 He was kind-M.SG
 ‘He was kind.’

長語尾形は名詞と同様に性・数・格という文法範疇を有するのに対し、短語尾形は性・数しか持たないということ、また短語尾形は述語用法しか持たないことから確かに、短語尾形は述語動詞と同じような振る舞いを見せるように思われる。したがって先行研究では、長語尾形は名詞型 (noun-like)、短語尾形は動詞型 (verb-like) 形容詞であるというように分析されてきた (Corbett 2004; Geist 2010; Plungian 2011)²。しかしながら、2 節で詳述するように、このような分析は、短語尾形は格変化と修飾用法 (や名詞句用法) を歴史的に失ったという通時的な側面や短語尾形が名詞や長語尾形と同様に性・数という文法範疇を有するという共時的な側面が考慮されているとは言い難い。そこで本発表では、ロシア語形容詞短語尾形について、形容詞の歴史的な変遷という通時的な側面と名詞や長語尾形などとの関連という共時的な側面を Shibatani (2019) などで提唱されている体言化理論の観点からを検討し直すことで、歴史的な格変化の消失と修飾用法 (や名詞句用法) の消失は動詞に近づくことは意味するのではなく、あくまで述語用法に特化した名詞に準ずる構造 (準体言) であるということを示す。

2 ロシア語形容詞短語尾形の取り扱いの問題点

1 節で述べたように、主に言語類型論の文脈において、ロシア語形容詞長語尾形は名詞型 (noun-like)、短語尾形は動詞型 (verb-like) 形容詞として分析されてきた。確かに、このような分析は、長語尾形と短語尾形の差異を捉えるためには有効かもしれない。しかしながら、以下で述べるように、短語尾形をより大きな視点で見たとき、すなわちロシア語形容詞の歴史的な変遷という通時的な側面や、名詞や動詞などの他の品詞との繋がりという共時的な側面を考慮に入れたとき、短語尾形を動詞型 (verb-like) とする分析は説明ができない点が観察される。

現代ロシア語の形容詞短語尾形は歴史的に格変化や修飾用法を失ったものである (Ivanov 1983: 307) が、古 (代) ロシア語においては、名詞と同様の格変化を有し、長語尾形と同様に修飾用法を有していたことが知られている。また古 (代) ロシア語では形容

² 先行研究によっては、ロシア語の形容詞短語尾形を動詞範疇 (verbal category) に属するとするものもある。

詞短語尾形が名詞句用法を持っていたことを示唆する例があるという（石田 1996:344）。つまり形態的，統語的にも名詞と差がないことから短語尾形は名詞型形容詞とされていた（石田 2007: 251）。一方で長語尾形は短語尾形に承前代名詞を付加したことから派生したものであり，その形態，格変化は代名詞と同様であった。したがって長語尾形は代名詞型形容詞とされていたのである。以上のような歴史的な事実を考慮に入れると，浮かぶ疑問は，元々，名詞と同様の形態・機能を有し，名詞型形容詞とされていた短語尾形が現代ロシア語において果たして動詞型（verb-like）となるかということである。言い換えれば，格変化と修飾用法を失うことが人称や時制という文法範疇を有する動詞に近づくということの意味するのかということである。

さらに，現代ロシア語の形容詞短語尾形の振る舞いに着目し，動詞型（verb-like）として結論付けている Geist (2010) が挙げている以下のような動詞的な特徴は，動詞のみで観察される特徴ではない。

(2) 短語尾形は述語位置で動詞のように補語を取る（Geist 2010: 248）

短語尾形: Rebonok **bolen** gripp-om. (Geist 2010: 248)
 child.M.NOM ill.SF flu-INS
 ‘The child is ill with the flu.’

名詞: Moj-a rabot-a – **upravlenie** proizvodstv-om
 my-F.NOM occupation-F.NOM management manufacture-INS
 ‘My occupation is a management of manufacture.’

(3) 精神・身体状態を表す短語尾形の主語は活動体名詞（人間，動物等）しかない
 (Geist 2010: 249)

短語尾形: Jubk-a ej **velik-a**
 skirt-F.NOM she.DAT big-F.SF
 ‘The skirt is too big for her.’

名詞: * U jubk-i **depressija**
 at skirt-F.GEN depression
 ‘The skirt is depressed.’

(3) の特徴は，上記の例文のように，全ての短語尾形に当てはまるものではない。つまりこれはあくまで意味的な問題である。精神・身体状態を表す述語の主語が活動体名詞となるのはその意味の特性上，何も不思議なことではなく，それは名詞にも当てはまる。すなわち，これら (2), (3) の特徴は，確かに短語尾形が持つ長語尾形との差異としては当てはまるものではあるが，あくまで動詞固有のものではない。したがって，これらは短語尾形を

動詞型 (verb-like) と結論付ける根拠にはならない。

つまり、通時的な側面だけでなく、現代ロシア語が持つ共時的な特徴からも形容詞短語尾形は動詞型 (verb-like) であるとは言い難い。現代ロシア語の動詞は以下の (4) のように人称、時制³、数というような文法範疇を持ち、これは性・数という範疇を持つ形容詞短語尾形とは大きく異なる。

(4)	Ja	čita-ju	knig-u.
	I.NOM	read-PRS.1SG	book-ACC.SG
	‘I read a book.’		

つまり、形容詞短語尾形を動詞型 (verb-like) と分析することは、短語尾形は名詞や長語尾形と性・数という文法範疇を共有するにも関わらず、それらを分断してしまうことになる。すなわち、これらはなぜ性・数という文法範疇を共有するのかということ、当然のことながら、問われていないということである。つまり先行研究は、上述したように短語尾形と歴史的に明らかに関係がある名詞や形容詞長語尾形とを分けて分析する一方で、短語尾形とは異なった文法範疇を持つ動詞と統一して分析しているということである。

以上のことから、先行研究が形容詞短語尾形を動詞型 (verb-like) と分析してきたことには疑問が残る。そこで次節では、Shibatani (2019) などで提唱されている体言化理論の観点からロシア語形容詞短語尾形を捉え直すことで、以上のような問題点を解決し、通時的、共時的により優れた分析を与えることを試みたい。

3 体言化理論による再分析

2 節で挙げたような先行研究の問題は、現代ロシア語の形容詞短語尾形のみにしか着目していない点にある。確かに現代ロシア語の形容詞短語尾形は述語用法専用形であるが、述語用法は動詞固有のものではない。そこで本発表では、Shibatani (2019) などで提唱されている体言化理論の観点からロシア語形容詞短語尾形について検討する。

体言化理論とは、ロシア語などに見られる文法性の標示（以下では性標示）は体言化の機能を有するというものである。体言化理論に従えば、形容詞や指示詞、所有詞、関係詞等々の性標示を持つ要素は、体言（名詞）に準じる構造、すなわち準体言として機能する。つまり固有の性を持つ名詞と固有の性を持たず性標示によって体言化された連体修飾要素⁴は、共に文法性という範疇を共有し、体言（名詞）の名の下で統一的に捉えられる。つまり、以下の図 1 のような名詞が持つ二大用法を準体言も持つと考えることができる（なお、ロシア語でも (1) で示したように、図 1 のような用法を持つ）。

³ ロシア語動詞の過去形は、歴史的に形容詞短語尾形と同様のもので、形容詞短語尾形のように、性と数を持つ。しかしながら、動詞の過去形は、それ自体が過去という時制を持つという点において形容詞短語尾形とは大きく異なる。

⁴ ロシア語において性標示を持つのは、現代ロシア語の形容詞短語尾形がそうであるように、連体修飾要素に限ったことではないが、ここでは連体修飾要素で代表する。

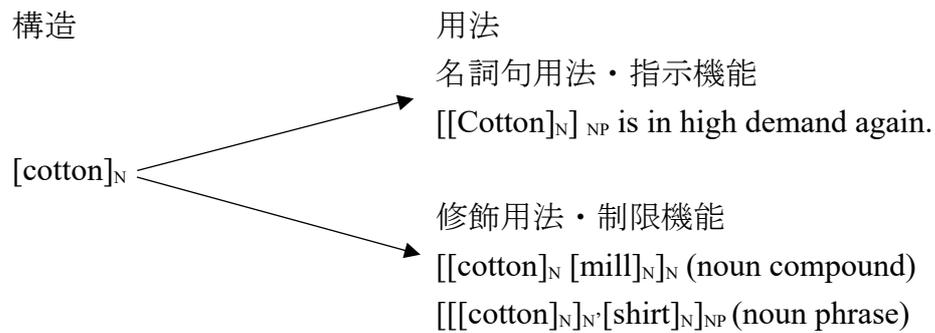


図1 名詞の二大用法 (プラシャント&柴谷 2020: 423)

つまり体言化理論によれば、ロシア語の形容詞は、長語尾形、短語尾形ともに性標示によって体言化を受けた準体言であると考えられる。現代ロシア語の形容詞短語尾形に関しては、確かに、述語用法専用形となっていて、一見、体言化理論に反するように見える。しかしながら、前述したように短語尾形は元々、古(代)ロシア語においては、名詞と形態的、統語的に差がなく用いられたのであって、この時点での短語尾形は体言化理論が示唆するような準体言そのものであったと考えることができる。つまり現代ロシア語の短語尾形は、歴史的に格変化を失った準体言であって、これは先行研究が考えているように動詞に近づくということの意味しない。事実、ロシア語は、以下の(5)のように名詞が述語用法を持つと考えられ、その際の名詞に格変化は原則、必要がない⁵。短語尾形は述語として用いられている名詞と基本的に差異はない。

(5) 名詞と短語尾形の述語用法

名詞:	On	(byl)	stroitel'
	he	(was)	builder.M.NOM
	'He is (was) a builder.'		
短語尾形:	On	(byl)	zdorov-Ø
	he	(was)	healty-M
	'He is (was) healthy.'		

また、短語尾形を準体言であると考えすることは、短語尾形の有無や長語尾形の派生についても説明を可能にする。1節で述べた通り、ロシア語の形容詞の多くは短語尾形と長語尾形という2種類の語尾を持つ。しかしながら、名詞との関係を表すいわゆる関係形容詞は通常、短語尾形を持たないことが知られている(Švedova et al. 1980: 557)。これについては、

⁵過去形の際には、名詞述語や形容詞の長語尾形が具格(造格)で現れ、主格とは異なる意味を持つことがある。両者の意味の差異については本発表では扱わない。

以下の (6) のように、多くの関係形容詞は、名詞にいわゆる形容詞語尾を付与することで派生するものであるからであると考えることができる。一方、物事の性質や特徴を表す性質形容詞は短語尾形を持ち、短語尾形にいわゆる形容詞語尾を付与することで派生するものである。

(6) 形容詞長語尾形の派生

krasiv-Ø	+	形容詞語尾	→	krasiv-yj
beautiful-M.SF				beautiful-M.LF
avtobus	+	形容詞語尾	→	avtobusn-yj
bus.M				bus-M.LF

つまり、長語尾形の派生基として、短語尾形と名詞は同様の役割を果たすと言える。またこのように考えることは、関係形容詞が短語尾形を持たないこと、さらに性質形容詞が短語尾形を持つことの説明を可能とする。

以上のことから、ロシア語の形容詞短語尾形は体言化理論で考えられているように性標示によって体言化を受けた準体言であると考えることができる。これは現代ロシア語では述語用法のみしか持たない短語尾形も上述したような歴史的な変化を考慮することで一貫して説明ができる。さらに、先行研究が名詞や長語尾形と分断して分析してきたのに対して、体言化理論では、性標示を持つという特徴から、名詞や形容詞などの連体修飾要素を統一的に捕捉できるという利点がある。短語尾形を準体言として分析することは、2 節で取り上げた (2), (3) のような特徴も矛盾することなく説明することが可能であり、先行研究が与えてきた分析よりも説明力があると考えられる。

4 おわりに

ロシア語形容詞短語尾形は、以下の図 2 のように、歴史的に格変化を失った準体言であると考えられるべきである。

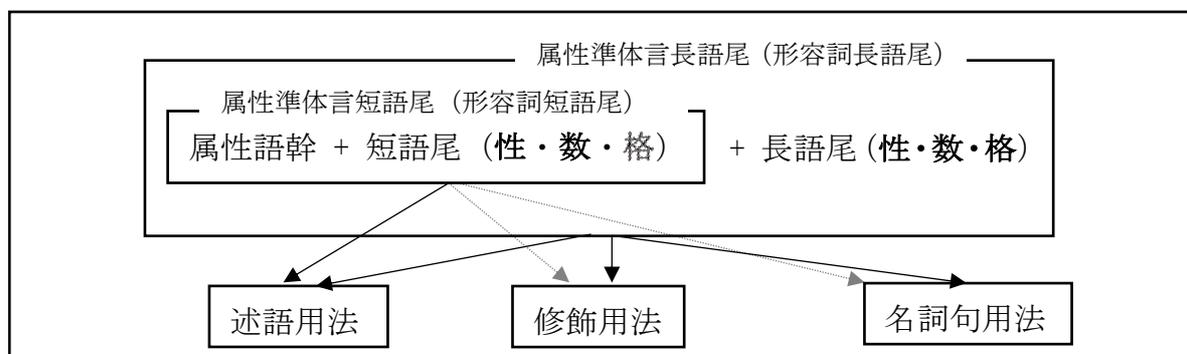


図 2 ロシア語属性準体言の用法

体言化理論が示すように、性標示は体言化の機能を持ち、名詞と形態的、統語的に差のない形容詞短語尾形を派生した。これが歴史的な変化によって格変化を失うことによって、現代ロシア語のような述語用法専用形として短語尾形が現れたと考えることができる（ロシア語形容詞の歴史的な変遷に関する仮説については、水野（2022）を参照されたい）。つまり、これは格という範疇は、名詞の機能分類において、存在意義を持つと考えられ、格変化を持たないことが名詞でないということの意味するわけではない。

本発表で残された課題は以下の通りである。まず、述語用法が体言化理論にどう組み込まれるかという問題がある。体言化理論では名詞が持つ主な用法として述語用法は挙げられていない（図 1 参照）。少なくともロシア語においては、名詞述語を持つと考えられる。したがって名詞の用法として、独立した述語用法を設けるか名詞句用法の下位分類として扱うことができると考えられる。本発表では前者を採用している（図 2 参照）が、述語用法が体言化理論にどう組み込まれていくかという理論的な観点については今後の課題として、引き続き検討していきたい。

次に、文法格という文法範疇をどう取り扱うかということがある。ロシア語では上述したように、格変化の有無は名詞に属するか否かには関与しない。この事実は、述語用法の名詞は格変化を持つ必要がないということを示唆する。すなわち (5) では、便宜的に主格というようにグロスを付したが、これはゼロ格である可能性がある。これに関してはより類型的な検討をし、理論的な考察が必要である。

参考文献

- Corbett, Greville (2004) The Russian adjective: A pervasive yet elusive category. In R. M. W. Dixon & A. Y. Aikhenvald (Eds.) *Adjective classes*. 199-222. Oxford: Oxford University Press.
- Geist, Ljudmila (2010) The argument structure of predicate adjectives in Russian. *Russian Linguistics*. 34 (3): 239-260.
- Ivanov, V. V. (1983) *Istoričeskaja grammatika russkogo jazyka*. 2nd edn. Moskva: prosvěšćenie.
- Plungian, V. A. (2011) *Vvedenie v grammatičeskiju semantiku: Grammatičeskie značenija i grammatičeskie sistemy jazykov mira*. Moskva: RGGU.
- Shibatani, Masayoshi (2019) What is nominalization? Towards the theoretical foundations of nominalization. In Zariquiey, Roberto, Masayoshi, Shibatani, and David Fleck (eds.), *Nominalization in Languages of the Americas*. 15-168. Amsterdam: John Benjamins.
- Švedova, N. Ju. (ed.) (1980) *Russaja grammatika*, Tom I. Moskva: Nauka.
- 石田修一 (1996) 「ロシア語歴史文法」石田修一（編）『ロシア語の歴史』172-365. 吾妻書房
- 石田修一 (2007) 『ロシア語の歴史－歴史統語論－』ブイツーソリューション.
- ブラシャント・パルデシ, 柴谷方良 (2020) 「マラーティ語の名詞修飾表現－体言化理論の観点から－」
ブラシャント・パルデシ, 堀江薫（編）『日本語と世界の言語の名詞修飾表現』413-445. ひつじ書房.
- 水野庄吾 (2022) 「ロシア語の形容詞語尾の変遷に関する仮説」関西言語学会第 47 回大会, zoom, 2022 年 6 月 12 日